

## 青年部の副部長に就任して

高知県遺族会青年部副部長

北村 直子

私が幼い頃、我が家では「戦争」の話はご法度という雰囲気がありました。

「戦争」の番組が始まるとチャンネルを変えられた記憶があります。今思えば、父は思い出さなくなかったでしょうし、祖母は祖父が戦死したことを認めたくなかったのでしょうか。そんな幼少期を過ごした私は、「戦争」に関して全く無知でした。もちろん、授業で教わったと思うのですが……。

そんな私が大人になって旅行会社に就職し団体営業を始めた頃、ある老人が店頭に現れて「グアムに慰霊に行くのでチャーター機を飛ばしてほしい」とおっしゃいました。今から二十五年以上も前の話です。この老人は中西重則さんとおっしゃって宿毛市の市長もされていた方で、グアム戦の機関兵でした。「グアムに慰霊？チャーター機？」何のことやら分からず、ぼかんとして居る私に「お前はグアムで戦争があったことを知らんがか？」と中西さん。「はい。」と頷く私。そうです。そこから、猛烈な勢いでグアム戦線のレクチャーが始まりました。あとはもう中西さんが言うがままに、コースを作り手配をしました。その間、中西さんは自分でこつこつ集めた遺族

の連絡先に一軒一軒連絡し人を集め、あつという間に一〇〇名を超える参加者となり、中西さんを団長とする「グアム島慰霊団」のチャーター機はグアムに出発しました。

グアムでの初めての慰霊祭のことを今でも忘れることはありません。団長の指示通りに、島の繁華街から外れたジャングルの中に真っ白いテントを張り、椅子を並べました。周りは人の背丈以上もある雑草で覆われていて、前日から現地のスタッフが草を刈って慰霊祭の準備をしてくれていました。

慰霊祭が始まってすぐの頃、ジャングルの奥から真っ黒な蝶々が飛んできました。漆黒のビロードのような羽根の綺麗な蝶が大群で私たちの周りを飛び始めました。その蝶々に向かって誰かが「親父——！迎えに来たぞ——！」と叫びました。年配の女性は肩に止まった蝶々に「お父さん、一緒に帰ろうね」と涙ぐんでいます。訳も分からない現地のスタッフも私も、ただ、泣いて見守りました。

出発前に中西さんに「お前のおじいちゃんは、どこで亡くなったぞ？」と尋ねられても答えることができなかった私。「お墓をちゃんと見ろ！」と怒られてお墓を見に行き、フィリピンで亡くなったことを知りました。慰霊祭の後で、中西さんに「私もフィリピンにおじいちゃんを迎えに行く」と告げると中西さんは笑って褒めてくれました。

帰国後、遺族会や県庁に出向き情報を集め、学生時代以上に勉強をしてフイリピン慰霊の旅を実現させることができました。本当は祖母を連れて行きたかったけど、出発の二週間前に亡くなってしまうました。おじいちゃんが戦死したことを最後まで認めていなかった祖母にとっては、複雑な思いだったと思います。お葬式の後、祖母の遺品の中からたくさんの手紙が出てきました。戦友からの手紙もありました。「ご主人は名誉の戦死をされました」と書かれていました。この手紙を誰にも見せずに隠し持っていた祖母を想うと胸が締め付けられる思いです。

そして、あんなに無知だった私が、高知県遺族会青年部（次世代の会）の副部長になってしまいました。今頃、中西団長は天国で笑っていることでしょう。副部長といっても私に何ができるのか……。たいそうなことは出来ませんが、仕事柄、人に会う機会には恵まれていますので、「私は遺族会青年部の副部長です」といろんな人に伝えて行こうと思います。

かつての私がそうだったように、自分の身内が戦争で亡くなったことを知らない人もまだまだたくさんいらっしゃると思います。そんな人たちに興味を持ってもらいたいです。日本に残してきた家族を守るために、食べ物も武器もないジャングルの中で戦って死んでいった多くの日本兵がいたことを知ってもらいたいです。そしてその亡くなった一人一人のおかげで

こうして生きていることを忘れてはいけないんだと伝えていきたいと思っています。

昭和二十年六月二十九日、七十四年前の今日、おじいちゃんはルソン島のレイハンで亡くなりました。三十八歳でした。私はおじいちゃんが命を懸けて守ってくれた価値のある人間になれているでしょうか？これからおじいちゃんの遺影に問いかけていきます。

こんな未熟者ですが、温かく見守ってください。どうぞ宜しくお願いいたします。

令和元年9月10日発行「高知県フイリピン遺族会だより第36号」より